

文語の苑

メールマガジン第十五号（平成二十四年九月）

ヴィパッサナー修行

ヴィパッサナーは小乗仏教（上座部仏教）と言つべきだが、分かり易いので本稿ではこの語を用いる（の瞑想法である。小乗仏教ではこれは釈尊自身が指導した行法そのものであると言っている。ヴィパッサナーは文献としては西域を経由して中国、ひいては朝鮮、日本にも渡来したが、技法そのものはいくつまで伝わらなかつたと言われている。仏教では瞑想を禪定と呼んでいるが、天台では止観とも呼ぶ。その場合「止」は心を静めるためのもので、小乗でサマタと呼ぶものである。観はその基礎の上に更に進んで物事をありのままに見るための技法であつてこれこそヴィパッサナーそのものである。小乗によればサマタのやり方は数多くあるが、ヴィパッサナーは唯一つしかない。天台でも観の技法は伝わらなかつたと小乗の人たちは言っている。

行法の説明に入る前にその背後にある考え方を見てみよう。

小乗と大乘の違いを表すのに次の表現がある。

無我法有 我法俱空

小乗では「我」というものは存在しない。しかしこの世の森羅万象は存在する。」と主張する。ここでは森羅万象を法と呼んでいる。無我法有とはその意味である。これに対し大乘では存在しないのは我だけでなく森羅万象全て幻の如くであると主張する。ただここで無という言葉は使わず空を用いている（何故かを説明すると長くなるから止める）。自我、森羅万象ともに空であるといつのである。

ヴィパッサナーは無我という真理を直観的に把握するための修行であるが、そのことは同時に「法」と密接に関わっている。前に森羅万象を法と言つたが、実は小乗ではこれを法と非法に分けている。五感に直接入ってくるものが法であつて、それを頭の中で更に処理したものは想像の産物に過ぎず従つて実在せず非法と呼ばれるのである。現代風に言えば一次情報のみが法であつて実在し、情報処理された二次、三次情報は非法であつて存在しない。小乗仏教はこの世は所詮苦であると断じ、その苦から脱却する手立てを提示するものであるが、その苦のよつて来るところは我を含め全て非法つまり二次情報である。

さて我々は四六時中物思いにふけっているが、その多くは過去、未来に関わるものである。これは全て非法である。また現在についても鳥の鳴き声を聞いて鳥が啼いていると観念すればそれは非法である。カーという音を聞いたところまでが法であつてそれが鳥であると言つた瞬間に判断という情報処理が加わり非法になるのである。赤い花を見て美しいと思えばもう非法である。好悪の情が加われればもう二次情報である。

そう考えると我々はほとんど非法の世界に住んでいるといわざるを得ない。これに比しほとんど常に法の世界に住んでいる人があるとすれば、その人はあるがまさに現実を直視し苦しみや悩みとは無縁である。その人を「覚めている人」「覚者（サンスクリット語でブッダ）というのである。この点からみればヴィパッサナーとは仏陀になるための修行である。この修行を続けて行けば我というものが実は二次情報に過ぎず実在しないということが自ずと腑に落ちるのである。

文語の苑

メールマガジン第十五号

小倉百人一首 十四 凡河内躬恒おほほむちのみつね

心あてに折らばや折らむ 初霜の置きまどはせる白菊の花

この歌を素直に、虚心坦懐に読むと、どのや（よ）うな場景が眼に浮ぶでせ（しよ）うか。朝まだき、庭一面に真つ白に霜が降りてゐ（い）ます。まだ咲き残つてゐ（い）る白菊の花と見紛ふ（う）（ば）かり。そんな初冬の朝の清冽な光景が、まざまざと眼前に浮び上つて来るのではないでせ（しよ）うか。

この歌は、明治の正岡子規が徹底的に攻撃して、「一文半文のぬうちもこれ無き駄歌」と極付けたことが知られてゐ（い）ます。「…嘘の趣向なり、初霜が置いた位で白菊が見えなくなる氣遣無之（これなく）候。趣向が嘘なれば趣も糸瓜（へちま）も有之不申（これありまうさず）」と、こてんぱんの批判です（『歌よみに與ふる書』）。

正岡子規は、日本の和歌の歴史を総括し直して、萬葉集の歌を高く評価し、江戸時代や明治時代まで、和歌の標準と見られてゐ（い）た古今集以降新古今集に至る歌を、激しく批判しました。この歌の批判も、その一つの例です。

子規には、新生日本の詩歌を建設する氣負ひ（い）（の）や（よ）うなもの、あつたに違ひ（い）ありません。そのためにヨーロッパ文学の自然主義や写実主義に惹かれたのでせ（しよ）う。子規の写生重視は、その観点からの問題提起だつたと思は（わ）れます。

藤原定家を評価しない子規にとつて、百人一首の歌は、ほとんどが感心しない歌だつたでせ（しよ）う。しかし私は、子規の壮烈な意気に感心し、子規と同じく萬葉集の歌を愛誦しますが、それでも日本の和歌の黄金時代は、平安時代から鎌倉時代に掛けての、八代集の時代であるとの考へ（え）が換へ（え）られません。ですから私にとつて、この凡河内躬恒の歌は名歌で、「駄歌」ではない。霜と白菊の花を取違へ（え）る趣向には、作者の天真爛漫な遊び心とユーモアがあつて、ほのぼのとした魅力を感じます。

凡河内躬恒は、古今集が撰せられた醍醐天皇の時代に生き、天皇にも仕へ（え）た下級の官人だつたらしい。和歌の才は、広く認められてゐ（い）（た）や（よ）うです。あるとき天皇が御階（みはし）の下に躬恒を召して、「月のことを言張と言ふ（う）（が）それはなぜか。歌で答へ（え）よ」と命ぜられました。すると躬恒は直ちに、

照る月を言張としもいふことは山べをさして入ればなりけり
とお答へ（え）します。「入る」と「射る」を掛けたお答へ（え）です。

天皇はいたくお喜びになり、白い、大桂（うちぎ）といふ（う）衣を御下賜になります。この衣を賜つたときは、必ず肩に掛けて、退出することになつて居りました。躬恒は退出しながら詠ひ（い）ます。

白雲のこのかたにしも降りぬるは天つ風こそ吹きて來ぬらし
「かた」は肩と方との掛け言葉です。当意即妙の歌の才もさることながら、躬恒といふ（う）人の、無邪気で、可愛らしい人柄が偲ばれます。

この頃には、和歌を介しさへ（え）すれば、天皇と下級の官人の間でも、このや（よ）うな、微笑ましい君臣の睦み合ひ（い）があつたのでせ（しよ）う。

文語の苑

メールマガジン第十五号

君が八千代をまつ祈るかな

愛國百人一首を讀む(十一)

(平成二十四年八月二十五日)

くもりなきみどりの空を仰ぎても君が八千代をまつ祈るかな

藤原定家

雲一つない青空を仰ぎ見るにつけても、我が君(順徳天皇)の幾久しい御榮えを眞つ先に御祈り申上げるのである。

上の句の「みどり」は緑から青までの色を指します。「君が八千代」の君は當然のことながら帝を指してゐます。この歌は、詠者藤原定家の自撰私家集「拾遺愚草」の中で、「内大臣家百首」に収録されてゐます。順徳天皇の御世建保三年(一一二五)、内大臣の九條道家が歌人一人百首づつの歌を募集、慈圓、家隆なども應募してゐます。定家は此の中で五首の祝歌を入れ、その第一「天」として掲出のこの歌で眞つ先に帝の御榮えを祈念してゐます。

定家は新古今、新敕撰の二つの敕撰和歌集の、また小倉百人一首の撰者として、近代秀歌、毎月抄などの歌論の書を著し、當代一流の歌人であると共に、源氏物語を始め多くの古典の寫本の校定を行ふなど數多くの文化的な業績を上げました。

しかしそれらにも益して重要な功績は、「假名遣」といふ概念を初めて確立し、その表記を「定家假名遣」として實現したことです。定家の時代の百年くらゐ前から、國語の音韻變化が起り、それまでの「かは(川)が「かわ」に、「こひ」(戀)が「こゑ」に等となりました(謂はゆる八行轉呼)。實際の發聲は例外無く變化しましたが、書く方は誰も關心をもたず、「かは」と「かわ」とが雜然と共存する状況でした。定家はこれを異常と氣付き、川は「かは」、戀は「こひ」と音に依存せず、古の表記を守るべきことを主張したのです。

この考へ方は特に和歌の世界を中心として明治時代まで、約七百年間受繼がれて來ました。但しその理論構成と實例の中には不足の面もあり、五百年後の契沖による全面的改訂により、今日の歴史的假名遣となるのですが、それでもなほ、定家が鎌倉初期に於て書き言葉の獨立を主張、實現した功績は些かも減ずることはありません。定家はその著「下官集」に書いてゐます。

只愚意分別之極みたる僻事也。親疎老少一人も同心之人無き。最も所謂道理なり。況して亦當世之人書く所之文字の狼藉、古人之用ぬ來る所を過ぐ。心中に之を恨とす。

この假名遣は私個人の愚考であり、誰も贊成する人はゐないのも道理である。況してこの頃の人の文字の使ひ方は古人の其れではなく、濫れてゐる。之を心から遺憾に思ふものである。

さうして又、上述の事は先師の説ではなく、只自分の意見であり、古い寫本を見て辨つたのであると書いてゐます。自ら考へ、自ら實行する定家の不屈の精神は今日もなほ求められませう。

その定家が順徳天皇に捧げたこの祝歌を讀み返してみますと、「くもりなきみどりの空をあふぎても」と素直な詠みぶりの中に、何とも清々しく、充實感のある氣分が傳はつて來ます。さうして下の句「君が八千代をまつ祈るかな」と併せて、天皇と共にある皇御國に生まれ合はせた悦びを歌つてゐることに氣附きます。有心體、妖艷など高度の技を驅使した多くの名歌を詠んだ定家の、何の技巧も加へずに詠んだこの歌は、和歌の本質と同時に愛國の眞の意味を考へさせてくれます。

市川浩

文語の苑

メーラムガジン第十五号

文語歌曲「螢の光」(明治小學唱歌集)

民族にはどうも固有の音階があるやうで、明治以降西洋音楽を中心に教育がなされてきて、日本人になじめるのは「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ」の七音階ではなく、五音階、特に「ド・２レ・３ミ・５ソ・６ラ」からなる、いはゆるヨナ(四七)抜き音階が好まれるやうです。この五音階は、しかし世界に一つの流れのやうになつて存在し、北歐からスコットランド、アメリカの民族音楽にみられます。明治の初期に幾つも作られたいはゆる翻譯唱歌に、多くのスコットランド民謡が取入れられたのは、日本人には馴染み易い音階だったからです。「故郷の空」「つつくしき」がさうですが、「螢の光」もその一つです。

民謡「Auld Lang Syne」といふ、スコットランドへの愛を詠みこんだ歌詞がつけられてからこの曲は、欧州やアメリカでも大晦日のカウントダウンに使はれ、讚美歌にもなつたりして廣く歌はれましたが、アジアでも卒業式や葬儀などでよく使はれます。韓国ではこのメロディが一頃までは愛國歌として國歌になつてゐたさうです。

小學唱歌集には名前が出てゐませんが、作詩は東京師範學校の教師だった稻垣千穎ちかひです。作文や漢文の讀本、修身書まで書いてゐる稻垣は、音楽取調掛員になつて、幾つもの唱歌の歌詞を書いてゐます。一番と二番は雅であるべき歌といふ方針に沿つてゐますが、今ではほとんど歌はれることのない三番と四番では、日本固有の國土の果にゐても眞心を盡くせといふあたり、當時の教育方針に沿つてゐたと云ふべきでせう。

一 螢の光、窓の雪、書讀ふみむ月日、重ねつゝ、何時しか年も、すぎの戸を、開あけてぞ今朝は、別れ行く。

* 螢の光、窓の雪、貧乏故、螢の光や雪に反射する光で勉強したといふ中國の故事。

* 年もすぎの戸「すぎ」が「過ぎる」と「杉」とに掛つてゐます。

二 止まるも行くも、限りとて、互かたみに思ふ、千萬ちよろひの、心の端を、一言に、幸さいくと許ばかり、歌ふなり。

* 互かたみに「かたみに」「お互ひに」、交はる交はる、といふ意味の古語

* 幸さいく 仕合せに、つつがなく、の古語

三 筑紫つくしの極み、陸むつの奥、海山遠く、隔へだつとも、その眞心は、隔へだて無く、一つに盡つくくせ、國の爲。

四 千島の奥も、沖繩も、八洲やしまの内の、護りなり、至らん國に、動なしく、努めよ我が背せ、恙つつが無く。

谷田貝常夫

文語の苑

メールマガジン第十五号

係り結び

「係りの助詞」といふのは、「ぞ・なむ・か・や・こそ」と憶えてゐる人が大部分です。

しかし、高校のとき、「は・も・ぞ・なむ・か・や・こそ」と習った記憶のある方もいらっしゃるのではないでせうか。

「は・も」とは何の「こ」でせう。

「は・も」「も」係りの助詞「なのですが」「終止形で結ぶ」のです。

終止形で結ぶのは文として當り前のことなので、「係り結び」をしてゐるわけではない、といふ誤解が生じました。そして、今では、國語教師もほとんどの人が、「は・も」が係りの助詞であるといふ意味を理解しなくなつてしまひました。

「は・も」が「係りの助詞」であるといふ意味は、連用中止形で終るべきところも終止形になる、といふ意味なのです。

「酒を飲み、女を買ふ」と言ひます。

ところが、「を」を「は」に變へると、「酒は飲み、女は買ふ」とはなりません。

「酒は飲む、女は買ふ」となるのです。

「も」も同断で、「酒も飲む、女も買ふ」になります。

「飲み」と連用中止法になるべきところが、「飲む」と終止形にするので、「は・も」は「終止形で結ぶ係りの助詞」といふことができるのです。

「も」はともかく、「は」の方は終止形で結ぶ理由が推測できます。

「は」は主題提起の助詞です。「酒は」と言ひ出したら、「他のものはともかく、酒に關しては」といふ限定を行つたこととなります。英語の *as for* または *when it comes to* ね。

「酒」に限定したのに、「酒は飲み」と連用中止法を使って「留保」し、同じ文の中で「女」の話を始めたら、限定した意味がなくなつてしまふではありませんか。

そこで、「酒は飲む」と終止形にして「口話を終へ、改めて、「今度は女に關して言へば」と別の話に持つて行くのです。

連用形で、話を「留保」するのでなく、終止形で「終了」して、別の話を始めるのです。

そこで、「は」は終止形と結び附くやうになつたと私は想像してゐます。

もつとも、「男は殺し、女は攫ふ」などといふときは、連用中止法を使ひますが、この場合は、男と女に對して、それぞれ違ふことをするといふ意味です。「飲む」と「買ふ」は、むしろ並列的ですが、「殺す」と「攫ふ」は對立的であり、「殺すのではなく攫ふ」といふ、代替のニュアンスを持つてゐるのですから、同断に論じることは出来ないでせう。

その意味で、「は」があつても、必ずしも係り結びを生じませんので、他の係りの助詞とは少し様子が違ふといふことにならぬのでせう。

いづれにせよ、「は・も」が係りの助詞であることを、高校生にしつかり教へて欲しいと思ひます。

文語の苑

メールマガジン第十五号

高校生に、「田園將に蕪れなんとす。盍ぞ歸らざる」を示して、「なんで『歸らず』でなくて『歸らざる』
になつてゐるんだ」と訊きますと、「解らない」と言ひます。

「前に『ぞ』があるから、係り結びになつてゐるんぢやないか」と教へてやると、びつくりして、「えっ。
漢文にも係り結びがあるんですか」。

こちらの方がびつくりしてしまつて、「漢文だつて、文語文法で訓讀するんだから、係り結びがあるに
決つてゐるぢやないか」と言ふと、「古文と漢文と同じなんですか」と言ふ始末です。

そもそも言語がどのやうなものであるかを理解してゐないのです。

高校教師の中にも、この「盍ぞ歸らざる」を、『係り結び』ではなく、『疑問詞』が前にあるから連體
形になる」と教へる人がゐるさうです。むしろその方が多いとも聞いてゐます。(もつとも前述の生徒は
それにも氣附かなかつたのですが)

漢文の場合、疑問文以外には、係り結びが出て來ることは餘りありません。そこで、係り結びではな
く、疑問の場合の特殊な連體形であると教へたくなる氣持も解らないではありません。

しかし、それでは、古文・漢文に通じる、文語としての整合性がなくなつてしまひます。

漢文調の疑問文の場合、前に係りの助詞がなくても、連體形で結ぶことがあります。

文語聖書で有名な「如何でかかることどもありつべき」などがその例ですが、この「いかで」は「い
かでか」の「か」が省略されてゐるのです。

「如何でかかかることどもありつべき」とすべきところを、「いかで」だけで疑問詞だと理解される
やうになつたために、最初の「か」が省略されたのです。その隠れてゐる係りの助詞「か」と呼應して、
文末は終止形の「へし」ではなく、連體形の「へき」で結んだのです。

ですから、前に係りの助詞がないのに、連體形で結んでゐることがあるからと言つて、「係り結びでは
ない」といふわけではありません。

漢文にも係り結びはあるのです。

高田友

文語の苑

メールマガジン第十五号

オリンピック

猛暑の日本悉皆^{しつぱい}オリンピック・ムードに包まれ、夜を以て日に継ぎ、テレビに吸着せられたる者少なからず。

柔道女子五十七キ口級に於て、初の金メダルの栄光に輝きたる松本選手の粒粒辛苦を思ひて、感に堪へず。柔道観戦して懸念したることあり。すなはち、我國の純国技、すでに世の常のスポーツに墮したりとの思ひなり。

日本の武道、英語にていふのいはゆるマッシュアル・アーツにして、精神性も重要な一部たるべきなるに、外国人の選手は、かくあるべしとの教育を受けたりや否やの疑ひを免れず。胴衣の著しく乱るる等、見苦しき場面も多々ありき。ともかくにも、武道は精神修養が肝要なりと初心に立ち返るの要あらざるや。

オリンピックには懐かしき記憶あり。一九九八年長野にて開催せられし冬季オリンピックは金メダルラッシュとなりぬ。桂冠を受けたる選手のインタビュー傳へんがために通譯、本朝は言はずもがな、万邦より選拔せられて長野に集結するあり。毎日いづれの国より優勝者の出づるかをシミュレーションし、当該国の言語の通訳者を現地に送る。これが運営に当たる、すなはち我が所属する部署の責務にてありき。

スキー・女子モーグル競技において里谷多英選手優勝せんとは、誰か能く予測せし所ならんや。日英のＡクラス同時通訳者会場にをらず、後日に紛糾の種を残したりき。そのときより此の方、シュミレーションほど憂きものはなしとぞ覚ゆ。

毎朝七時より国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）と長野のオリンピック委員会（ＮＡＯＣ）との合同会議開催せられぬ。天候不良ならんには大回転は順延すべしなど、各競技の仔細に及ぶ談判を行ひたりき。会長サマランチ氏自ら議長を務むるこの会議の議事要約を日本語に訳し、長野側の担当者に交付するの職責、我が双肩に担ふ所となる。会議は英語を用ゐるといへども、世界各国の訛り混在し、且つは耳慣れぬ専門用語頻出するを以て、聞くにも訳するにも一方ならぬ難渋のこともありき。会議は八時三十分を終了せるに、その議事録を十時までに提出せよとの無理難題。眠る暇も^{いとま}なく酷使せられたり。

豈に図らんや、オリンピックとは、人をしてかくも熱狂せしむるスポーツ・イベントなると見て、疲労たちまち癒えたり。